

ディケンズ生誕 200 年記念
ディケンズ・フェロウシップ国際大会
International Dickens Fellowship Bicentenary Conference—2012
at Portsmouth University (9-14 August, 2012)

(報告) 渡部 智也

Tomoya WATANABE

まず一つ、大会に先立つイギリス入国の話を。2012 年は、ディケンズ生誕 200 年の年であるとともに、ロンドンオリンピックの年でもある。しかも、私が入国する 8 月 8 日は、まだ多くの試合の決勝戦を控えた、いわばオリンピックもたけなわという時期。入国には 1 時間から 3 時間はかかると脅されていた私は、いささか不安な思いを胸に入国ゲートへ向かった。しかし、この不安は杞憂に終わり、入国審査はものの 5 分で終了した。それも、ディケンズの話題が重要なキーとなった。私の入国カードを見た審査員は、なぜポーツマスへ行くのかと (当然ながら) 聞いてきたので、私は、自分はディケンズの研究を行っているが、ディケンズ生誕の地ポーツマスで国際学会が開かれるから、そこに行くのだ、と答えた。すると入国審査官は (中年の男性であったが)、「ディケンズが死んだのはギャズヒルだとは知っていたが、生まれたのがポーツマスとは知らなかった。これは知っておくべきだった!」と心底驚いたような顔をしながら述べて、あっさり私の入国を許可してくれたのである。イギリスの入国審査の、時に嫌らしいまでの厳しさと、その際にディケンズという名前が非常に有効であった、という話は、かつて中村隆氏も述べているが (『年報』第 25 号 91 ページ参照)、渡英直後に、ディケンズが生誕 200 年の現在もなお「生きている」のだな、と実感することが出来る、非常に貴重な入国審査体験となった。

さて、肝心の国際大会に話を移そう。大会初日の 8 月 9 日、午後から続々とディケンズアンたちが宿舎となるポーツマス大学のリーズホールに集結。3 時頃に現地に到着した私は、ここで早速、日本支部でもおなじみのマイケル・スレイター氏 (Michael Slater) やトニー・ウィリアムス氏 (Tony Williams)、アラン・デイルノット氏 (Alan Dilnot) らと再会することが出来た。なお、日本からは、支部長の佐々木徹氏、元支部長の西條隆雄夫妻、日本支部会員の瀬戸崎康子氏、それにディケンズ・レキシコングループとして発表を行う、今林修氏、田畑智司氏、西尾美由紀氏、そして私、という、合計 8 名の参加であった。

この日の夜はまずギルドホールにて、募金を集めるために『ニコラス・ニクルビー』を真似てロンドンからはるばるポーツマスまで歩くというイベントを敢行したイアン・ディケンズ (Ian Dickens), ジェラルド・ディケンズ (Gerald Dickens) の両氏を盛大に迎えた後、ギルドホールの中で「ポーツマス市長によるレセプション」が行われた。ただ、こういうと聞こえは良いが、実際はギルドホールで市長立ち会いのもと乾杯を行う程度で、あまりに料理が少なかったため、参加者の多くが近くのパブに夕食を取りに行くような状態だった。その後、前述の二人のディケンズ氏による簡単な講演が行われる予定だったが、当初使う予定の会場がセキュリティーの問題で使えなくなり、残った人々の願いを聞き入れて、夜8時を過ぎて冷たい風が吹きすさぶ路上で二人が講演を行う、という、初日からとんでもない展開になった。とはいえ、このような状況にもかかわらず、二人はロンドンからポーツマスまでの道すがらに出会ったディケンズ作品的な面白い人々の話を引き合いに、朗読も交えて大いに我々を楽しませてくれた。

大会2日目の8月10日から、いよいよプログラムが本格化する。午前中には3つの講演が行われた。リードオフマンとして登場したのは、佐々木徹氏。細心精緻の読みによって作品中における“black”, “cripple”, “chimney”などの単語の結びつきを読み取り、ディケンズと靴墨工場という昔ながらのテーマに鮮やかに新しい光を当てた。続いてデイヴィッド・パロイシアン氏 (David Paroissien)。当時の歴史という



肌寒い屋外という悪条件にもかかわらず、好演を見せるジェラルド、イアン・ディケンズ兄弟。



微妙にピントのずれた質問に対し、苦笑交じりに応える佐々木徹氏。

ものに対する考え方や社会背景を元に、歴史小説『バーナビー・ラッジ』の読解を試みたが、穏やかすぎる独特の口調もあってか、やや単調で物足りなさを感じたのは否めない。続いてマイケル・スレイター氏が登場。こちらも『バーナビー・ラッジ』について、作品誕生の背景などを、いつもの極めて巧みな朗読を交えて説明し、聴衆を楽しませた。話の内容そのものは、おそらくディケンズ研究者であれば誰もが知っているような話題ばかりではあったが、時折差し挟まれる氏の朗読はいつもながら非常に惚れ惚れとさせられる出来映えで、特にミッグズのくだりなどは、これを聞かずに一生を終えるのは勿体ない、と感じさせられた。

昼食を挟んで午後からは、ディケンズが生まれた家（現在は博物館）、エレン・ターナンやマライア・ビードネルの眠る墓地、ジョン・ディケンズが働いていた海軍のオフィス、そしてディケンズが洗礼を受けた教会、といったポーツマスの名だたるディケンズ関連名所を巡るツアーが行われた。僅か数時間でこれらの場所を回ったため、さすがに参加者も後半は疲れを見せていたものの、非常に充実した時間となった。

夕食後、今度はキングスシアターで行われる『バーナビー・ラッジ』の公演を鑑賞。昼間にちょうど同作品に関する講演を二つも聴いた後なので、非常にタイミングが良い。舞台の中身としては、ほぼ作品をそのまま演劇にしたような感じで、佐々木氏の言葉を借りれば、「あまりイマジナティブではない」印象の舞台だった。全体に悪くはないのだが、『バーナビー・ラッジ』自体がいささか長すぎる作品だけに、もう少し色々な部分をそぎ落とすなりすれば、よりシャープな舞台になったような気がする。

大会3日目の8月11日は、フェロウシップ国際大会の二大イベントとも言える、AGM (Annual General Meeting) と晩餐の日であった。まずその前に、昨年日本支部にも招聘したジョン・ドリュー氏 (John Drew) が、ディケンズオンラインについての講演を行った。国際大会への参加者は、平均年齢が高く、どちらかと言えばパソコンを中心とした機械類を苦手に行っている人が多いように思われるが、映像と音声をふんだんに盛り込み、そこにさらに巧みなウィットをも加えたドリュー氏の講演は、多くの聴衆を魅了していた。その後のAGMでは、各支部の代表を点呼する際、日本が飛ばされる、というアクシデントが発生してしまった。しかしながらその際、こちらでアピールする前に、抜けているところはないですか、という問いかけに対し、多くの会員の方々が真っ先に「ジャパン！」と口をそろえて言って下さったのには、少なからず感動を覚えた。日本支部の諸先輩方がこれまでディケンズ・フェロウシップに対して非常に多くの貢献をされてきた賜物であるということ強く感じさせられる一幕だった。

昼食を挟んで午後からは、いくつかの部屋に分かれて発表や講演が行われた。私は前述の今林氏、田畑氏、西尾氏による、ディケンズ・レキシコンに関する発表を拝聴したが、他にも同時刻に興味深い講演が行われており、体が二つ以上欲しい心境だった。なお、三氏の発表は、今林氏が日本におけるディケンズ・レキシコンプロジェクトの概要を、故山本忠雄氏の関わりを中心に解説し、西尾氏がレキシコンによって明らかになる、ディケンズの特異なイディオムの使い方を例示し、田畑氏が実践的なレキシコンの使い方を紹介する、という分担で、非常に良く構成されていた。フロアからの質問も活発で、中身の濃い時間であった。



順番を待つディケンズ・レキシコングループ (左から今林氏、田畑氏、西尾氏。) 中央は司会のジョン・ドリュエー氏。

大会4日目は、午前中にマルカム・アンドルーズ氏 (Malcolm Andrews) の講演が行われた。アンドルーズ氏の講演は、分冊出版という現在とは異なる当時の特殊な出版方法が、ディケンズの作品の広まりにどのような影響を与えたかについて明らかにするという、非常に明快な発表だった。話のスピード、音量、スライドの使い方、あらゆる点で、今大会で最も明瞭な発表だったと言えるのではないだろうか (発表スタイルの異なる日本人発表者を除いて)。司会を務めたジョアン・ディックス氏 (Joan Dicks) の言葉、“digestible and lucid lecture” が、この

講演の良さを端的に表していたと思う。

午後からは遠足。ジェーン・オースティンゆかりの地を訪ねるツアーと、ローマ人の足跡を尋ねるツアーが敢行された。私は前者に参加したが、これが大変、いや、悲惨だった。同ツアーは人気が高かったため、2台のバスに分乗して観光に行ったのだが、我々の乗ったバスの運転手が事もあろうに道に迷い、延々とバスでさまよいつけたのである。最終的には何とか目的地にたどり着けたものの、我々は疲労困憊、さらに夕方に行われる教会でのイベントにも間に合わなかった。イギリスではよくあること、といえはそれまでなのかもしれないが、これはさすがにひどすぎた。初日の建物が使えない一件も含め、今大会は記念すべき大会であるにもかかわらず、マネジメントの面でいくつも問題があったのは残念である。

このひどい遠足の口直しの役割を果たしたのが、その夜に行われたジェラルド・ディケンズ氏のショーである。今回の朗読劇は“Complete Works of Charles Dickens”と題して、ディケンズの主要小説を一つにつなげるようにして朗読を行っていくというものだった。内容も登場人物も全く異なるような小説たちを、いったいどのようにつなげるのだろうか、と思って聞いていたのだが、氏の朗読はまさに名人芸で、まるで一つの物語を聞いているかのようにディケンズの主要小説すべてを楽しむことが出来た。特に後期の『大いなる遺産』から『我らが共通の友』『エドウィン・ドルードの謎』と川のモチーフを繋げて語り継ぐところは圧巻であった。

大会5日目の8月13日は、実質的な最終日であったが、午前中にかつて日本支部に招聘した二氏の講演が行われた。まずアラン・ディルノット氏は、『ボズのスケッチ』が「ディケンズにとって永遠に影響を与え続ける存在」だということを、いくつかのスケッチを取り上げながら例証した。続いて壇上に上がったトニー・ウィリアムス氏は、“The Impact of Dickens Fellowship”と題して、ディケンズ・フェロウシップの歴史を一つ一つ丹念に紐解いていった。両者とも非常に聞き取りやすい声で、巧みに聴衆を引きつけたが、ウィリアムス氏に関して言えば、多分に細かい年代や数字と関わるものであったので、スライドや資料など、視覚的に訴えるものがあつた方が分かりやすかつたのではないかという印象を覚えた。

午後からも講演が行われたが、その締めくくりの役を担つたのが、今大会の世話人でもあつたトニー・ポイントン氏 (Tony Pointon) である。ポイントン氏は、ディケンズとキャサリンの別居を巡る話が、いかにディケンズをおとしめようという人々によって歪められて伝えられているか、事細かに論じた。なかなか面白いと思うが、いかんせん、最初の導入部が長すぎるのと、話があちらこちらに飛ぶため、聞きづらい面が否めなかつた。



フェロウシップ精神あふれる打ち上げ会の一コマ。

夜は、“DFD: An entertainment on Dickens, Food, and Drink”と題して、スーザン・ヒーリー氏 (Susan Healey) とポイントン氏によってディケンズと食べ物、飲み物に関する愉快的朗読が行われ、すべてのプログラムが終了。最後に議長のマイケル・ロジャーズ氏 (Michael Rogers) が流ちょうなフランス語で、次回の大会が行われるブローニュでの再会を約束し、かくてディケンズ生誕200年を記念する大会は幕を閉じることとなった。

私の国際大会参加は今回で2度目になるが、最初から最後まで参加するのは今回が初めて。長丁場とトラブルで疲れた面もあったが、フェロウシップ精神に満ちた大会は、私に非常に有意義な時間を提供してくれた。